

クウェートに住むということ

後藤真実

クウェート留学もあと2ヶ月を切り、「あっという間だったね。」と毎日のように留学生同士で言葉を交わす。クウェートに来て初日、女子寮の食堂には誰もいなかったことを覚えている。女子寮全員で食事の質を改善するためのボイコットをしていたのだ。「アラブの春」により、中東全体の情勢が一層不安定になっている今、クウェートに降り立った私たちは初日からアラブ人の強い主張を目の辺りにすることになったのだ。食事はインドでもアラブでもない、中途半端な油っこいご飯とチキン。メニューは毎日同じ。過去の留学生の先輩たちは「すぐに慣れる。」と言っていたけれども、慣れる気がしなかった。10月2日、私たちがクウェートに到着した時には既に学校は始まっており、毎日3時間あるクウェート大学の授業も最初の週は先生が来ず、毎日1時間だけの時もあった。各国によりビザの手続きが異なるらしく、毎日のように新しい留学生がクラスに加わり、12月頃にやっとクウェートに到着した生徒もいた。外に出れば、交通ルールがほとんどないようなもので、毎日1回は事故を目撃し、それによって渋滞が始まるのは日常茶飯事。風邪をこじらせて病院に向かう途中でも、乗っていたタクシーが後ろから追突され、道端で急に下ろされたこともあった。また、少し外を歩こうとすると、道路を走っている車からクラクションを鳴らされ、声をかけられ、挙句の果てには「いくら？」と売春婦紛いに値段を聞かれるのである。寮では毎日のように停電、断水、インターネット遮断が起こった週もあり、寮母に苦情を言うと「文句があるなら外で暮らせ。」と理不尽なことを言われ、憤慨したこともあった。クウェートでは毎日、様々な問題と直面しなければならないのである。

私は3年ほどずっとクウェートに留学したいという気持ちがあり、合格通知を頂いた時は本当に嬉しく、アラビア語習得はもちろんのこと、絶対留学中何かを得て帰国したいと思っていた。クウェートには旅行で来たことがあったが、将来湾岸地域で仕事をしたいという身であるため、留学という長期滞在の中でクウェートの人々をもっとよく知りたいと思った。特に湾岸地域の女性の権利に興味があり、外部から傍観するのではなく、女性である特権を生かして、彼女たちの本当の素顔を見てみたいと思った。クウェートは他の湾岸諸国と比べて、比較的自由な国である。大学内では服装について男女とも半そで・膝下以上というルールがあるが、たまにミニスカートをはいたり、タンクトップのみの女子生徒もいる。クウェート人は日本・中国・韓国人の顔の違いはわからないが、老若男女、日本人に対しては格別好意を持っている。学食に座っていると、「日本のファンです。」とどこからともなく声をかけてくる子達もいるほどだ。クウェートではほとんどの人が英語を話すことができ、日常生活でアラビア語を話すことはほとんどない。労働人はみんな外国人（インド・パキスタン・フィリピン・エチオピア等）であるため、基本的には英語であるし、寮内でもみんな英語を使いたがり、アラビア語で話しかけても英語で返ってくるのがほとんどである。確かにアラビア語留学という目

的でクウェートに来ていると、エジプトやシリアなどに留学すべきだったという声は多い。しかしながら、私にとってはクウェートでの長期留学でしか得られなかった経験もたくさんあった。女子寮に住んですることで、他の湾岸諸国からの留学生の素顔を見ることができた。彼女たちの部屋の中から、服装、食事、人気のテレビ番組、テスト前の行動、生活用品、就寝・起床時間、男性が寮に入って来た時の反応、外国人労働者に対する扱い、自国に対する考え方、結婚式、卒業式など、私の階にはシーア派のバーレーン人が多かったため、シーア派だけの木曜の集会にも出させてもらった。残念ながら、私の住んでいる女性寮にはクウェート人がいないため、クウェート人の生活の一部始終を見ることは出来なかったが、自宅に招待されたり、一番仲の良いクウェート人の友人の親族のみの婚約式に出席したりと、結婚・恋愛・服装・政治・家族・自由・留学・将来・黒魔術・宗教・文化など様々なことを多くのクウェート人女性と話すことができた。彼女たちの外のベールだけでなく、心のベールの下を見ることができたのは、やはりクウェートに長期留学できたからこそだと思う。同時に、クウェートに住む日本人女性の方たちにもお話を聞くことができ、長く住んでるからこそ見えてくるクウェートの違った側面をたくさん学ぶことができた。

日本とクウェートは地理的にも遠く、お互い良く知らないことのほうが多いだろう。その中でも多くのクウェート人は日本に好意を持ち、そしてドラマやアニメを通しより日本を知ろうとし、東日本大地震の際は家族のように心を痛み、支援してくれた。私たちは留学を通し得た経験を日本とクウェートの更なる友好関係促進のみでなく、社会全体に貢献する使命があると思う。そして、これから来る新しい留学生達にも日本代表としての自覚を持ちながら、次の世代に繋がるような素晴らしい経験をたくさんしてもらいたい。

